

自分も他の人も大切にし、お互いに認め合うことができる児童の育成
～学級活動における参加体験型学習を活用した人権教育の取組を通して～

目 次

I	研究主題 -----	2	1
II	主題設定の理由 -----	2	1
III	研究の仮説 -----	2	2
IV	研究の全体構想 -----	2	2
V	研究の経過 -----	2	3
VI	研究の実際 -----	2	3
	1 研究における基本的な考え方 -----	2	3
	(1) 研究主題について		
	(2) 副題について		
	(3) 人権教育について		
	2 児童の人権に関する実態のとらえ方 -----	2	5
	(1) 人権に関する実態調査		
	(2) 実態調査の結果と考察		
	3 学級活動の内容(2)の年間指導計画の作成 -----	2	6
	(1) 学級活動の内容(2)と人権教育の内容との関連について		
	(2) 望ましい人間関係の育成を目指した題材配列の工夫		
	4 指導方法の工夫 -----	2	8
	(1) 指導方法の基本的な考え方		
	(2) 参加体験型学習の効果		
	5 検証授業Ⅰ -----	2	9
	(1) 事前調査から		
	(2) 検証授業Ⅰの実際		
	(3) 事後調査から		
	6 検証授業Ⅱ -----	2	13
	(1) 検証授業Ⅰと検証授業Ⅱとの関連		
	(2) 事前調査から		
	(3) 検証授業Ⅱの実際		
	(4) 事後調査から		
	7 児童の人権に関する実態調査等 -----	2	17
	(1) 実態調査の結果と考察		
	(2) 実践の振り返りアンケートの結果と考察		
VII	研究の成果と課題 -----	2	19
	1 成 果 -----	2	19
	2 課 題 -----	2	20
	〈引用文献〉 -----	2	20
	〈参考文献〉 -----	2	20

I 研究主題

自分も他の人も大切にし、お互いに認め合うことができる児童の育成
～学級活動における参加体験型学習を活用した人権教育の取組を通して～

II 主題設定の理由

本来、子どもたちは、人と交流しながら、互いに認め合い、支え合い、高め合って人間関係を築いていく。そして、その中で、自らを律し、相手の立場を思いやり、他人と協調できる心情や態度を身に付ける。しかし、現在、子どもたちを取り巻く社会や生活環境は、急激に変化している。それに伴って、自然体験や生活体験の不足、他者とのかわりの希薄化などが進み、様々な体験を通して人間関係の基本的な知識、価値観、技能を学ぶ機会が減少している。その結果、自分自身に自信や誇りをもつことができないう子どもたちや、よりよい人間関係をつくることのできない子どもたちが増えてきている。

こうした現状を踏まえ、これからの人権教育においては、子どもたちに自他の人権を尊重しようとする主体的な態度や行動力をはぐくむことを目指すとともに、自己理解や他者理解を深めさせ、違いを個性として受け止めることのできる感覚を養うことが求められている。

また、人権教育の指導方法等に関する調査研究会議が、平成20年3月に公表した「人権教育の指導方法等の在り方について〔第三次とりまとめ〕」では、人権教育を進めるに当たっては、人権についての知的理解を深化し、徹底させるとともに、児童生徒が人権感覚を十分に身に付けるための指導を一層充実することが必要であるとしている。

本県においては、平成17年4月に「宮崎県人権教育基本方針」が策定され、その推進のために、平成18年3月に「宮崎県人権教育基本資料」一幼（保）、小、中、高、盲・聾・養護学校一が作成された。その中で、人間関係から生じる問題を解決する方法及び伝え合い分かり合うためのコミュニケーション能力などを身に付けさせる方法として、参加体験型学習が紹介されている。また、平成19年3月に「人権教育指導資料」一小学校指導展開例一が作成され、道徳の時間や学級活動等における指導の流れが具体的に示された。さらに、平成20年3月には「人権教育ハンドブック」一小学校編一が作成され、参加体験型学習の理論とともに、その手法を用いた指導事例が示された。

研究実践学校では、教育目標を「心やさしく実践力のある今町っ子の育成」と掲げ、その具現化を目指し、重点目標の一つとして心の教育の充実を設定している。さらに、その努力事項を人権教育の推進とし、「人権感覚、言語環境を大切にされた教育活動の推進」と「人権教育の視点に立った人権尊重に関する正しい知識の習得、人権尊重に関する望ましい価値観の育成、よりよい人間関係をつくるための技能の定着」に取り組んでいる。その取組の一つとして、高学年では、年間1回程度の参加体験型学習を活用した授業を行っている。

研究実践学校は、すべての学年が単学級で構成されているので、児童は6年間の小学校生活を同じ学級で送ることになる。そのため、学年が上がるにつれて交流が深まり、お互いに何でも言い合える間柄になる。しかし、馴れ合いや軽い気持ちでの言動から、トラブルに発展することがある。また、人間関係が固定化されやすく、一度の出来事で友達のことを断定的に見る傾向もある。それらの原因として、日常生活において友達が持っている多様な考えや価値観に触れながら、自分や友達のことを深く理解する機会があまりなかったからではないかと考える。

このような研究実践学校の児童の実態から、自分の思いや考えを適切に表現する力や、相手の立場に立ってその人の思いや考えを理解する力を身に付けさせるために有効であるとされている参加体験型学習の活用が十分ではなかったのではないかと考えた。

そこで、望ましい人間関係の育成を内容とする学級活動において、人権教育の指導方法の一つである参加体験型学習を活用し、児童が主体的・実践的に取り組む学習を意図的、計画的に行えば、よりよい人間関係をつくるための技能を身に付けさせることができ、自分も他の人も大切にし、お互いに認め合うことができる児童を育成できると考え、本主題を設定した。

III 研究仮説

望ましい人間関係の育成を内容とする学級活動において、人権教育の指導方法の一つである参加体験型学習を活用し、児童が主体的・実践的に取り組む学習を意図的、計画的に行えば、よりよい人間関係をつくるための技能を身に付けさせることができ、自分も他の人も大切にし、お互いに認め合うことができる児童を育成できるであろう。

IV 研究の全体構想



V 研究経過

月	研究内容	研究事項	研究方法
4	○ 研究計画の作成 ○ 研究の構想	・ 資料収集 ・ 研究主題及び副題の設定	理論研究 理論研究
5	○ 実態調査① ○ 学級活動の年間指導計画の作成	・ 児童の研究前の実態把握 ・ 教科や行事等との関連	調査研究 理論研究
6	○ 実態調査②	・ 検証授業Ⅰ事前の実態調査	調査研究
7	○ 検証授業Ⅰ ○ 実態調査③	・ 参加体験型学習の活用 ・ 検証授業Ⅰ事後の実態調査	授業研究 調査研究
8	○ 検証授業Ⅰの分析と考察	・ 検証授業Ⅱの方向性	理論研究
9	○ 実態調査④ ○ 検証授業Ⅱ ○ 実態調査⑤	・ 検証授業Ⅱ事前の実態調査 ・ 参加体験型学習の活用 ・ 検証授業Ⅱ事後の実態調査	調査研究 授業研究 調査研究
10	○ 検証授業Ⅱの分析と考察 ○ 実態調査⑥	・ 検証授業Ⅰ・Ⅱの考察 ・ 児童の研究後の実態把握	理論研究 調査研究
11	○ 検証授業のまとめ ○ 実態調査のまとめ	・ 参加体験型学習の有効性 ・ 児童の変容	理論研究 理論研究
12	○ 実態調査⑦ ○ 研究のまとめ	・ 児童の変容の追跡調査 ・ 研究の成果と課題	調査研究 理論研究
1	○ 研究のまとめ	・ 研究紀要の作成	理論研究
2	○ 研究のまとめ	・ 研究発表資料の作成	理論研究
3	○ 研究発表		

VI 研究の実際

1 研究における基本的な考え方

(1) 研究主題について

人権擁護推進審議会答申（平成11年7月）において、人権尊重の理念は「自分の人権のみならず他人の人権についても正しく理解し、その権利の行使に伴う責任を自覚して、人権を相互に尊重し合うこと、すなわち、人権の共存の考えととらえる」とされている。

これを分かりやすい言葉で表現するならば、「自分の大切さとともに、他の人の大切さを認めることを通して、共に生きる社会の実現を目指すこと」である。¹⁾

そこで、本研究においては、人権尊重の理念を「自分も他の人も大切にし、お互いに認め合うことができる」としてとらえ、研究主題に設定し、次のように定義した。

ア 自分も他の人も大切にすることは

- 自分を肯定的に見ることができ、他の人とともによりよく生きようとする。
 - 自己理解を深め、自分の特性を知る。
 - 自分と異なる意見も尊重する。
- [目指す姿] 自分の思いや考えを相手の人格を尊重しながら伝えることができる。

イ お互いに認め合うとは

- 一人一人の違いを個性としてとらえ、互いの存在を尊重する。
 - 自他の個性を発見し、理解し、互いの特性を認め合う。
 - 相手の立場に立ち、いろいろなものの見方や考えを認める。
- [目指す姿] お互いのよさに気づき、そのよさを認め合うことができる。

(2) 副題について

「自分も他の人も大切にし、お互いに認め合うことができる」ために必要な人権感覚は、繰り返し言葉で説明するだけで身に付くものでなく、児童が学習に主体的に取り組むことを

通して養われるものである。そのためには、自分で考え、感じ、活動するような学習方法を取り入れる必要がある。

そこで、人権教育の指導方法の一つである参加体験型学習の活用が効果的であると考え、副題を「学級活動における参加体験型学習を活用した人権教育の取組を通して」と設定し、本研究で取り上げる内容を次のように整理した。

ア 学級活動と人権教育との関連

学級活動の内容(2)「日常の生活や学習への適応及び健康や安全に関すること。」に望ましい人間関係の育成が示されており、学級活動の充実は人権教育の内容の深化とも関連があり、重要な要素である。

イ 参加体験型学習

グループでの話し合いや体を動かす活動に学習者が主体的に参加し、それぞれが自分の気付きや考えを表現したり、他の人の気付きや考えを聞いたりする中で、問題を解決したり、問題について認識を深めたりしていく学習活動である。²⁾

ウ 参加体験型学習の手法

ロールプレイング、表現活動を取り入れた学習、ディベート、ブレインストーミング、フォトランゲージ、シミュレーション、ランキング、フィールドワーク等がある。

(3) 人権教育について

ア 人権教育の目標

小学校においては、発達段階に応じて、様々な人々とかかわりをもたせたり、集団活動に積極的に取り組ませたりすることにより、自他の人権を大切にしようとする実践力を育てる必要がある。

そこで、「宮崎県人権教育基本資料」には、小学校における人権教育の目標が次のように設定されている。

すべての人が幸せに生きるために、生命を大切にすることを理解し、自他のよさや違いを認め合いながら、共に生きていこうとする態度や人権を大切にしようとする実践力を身に付ける。

イ 人権教育の内容

これからの人権教育は、すべての人にとって効果的で自分自身を深く見つめることができるとともに、その内容は様々な人権課題と自分のつながりが見えてくるものでなければならない。³⁾

そこで、「宮崎県人権教育基本資料」には、人権尊重に関する正しい知識を習得させ、人権尊重に関する望ましい価値観を育てるとともに、よりよい人間関係をつくるための技能を身に付けさせることができるように、内容が次のように構成されている。

人権尊重に関する正しい知識	人権尊重に関する望ましい価値観	よりよい人間関係をつくるための技能
<ul style="list-style-type: none"> ○ 人権にかかわる概念 ○ 生命尊重 ○ 自己理解・自尊感情 ○ 人間関係の在り方 ○ 社会参加 ○ 同和問題をはじめとする様々な人権課題 ○ 人権に関する歴史や条約・法令等 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 生命あるものすべてが、かけがえのないものであることを認識し、生命を尊ぶ心をもとうとする。 ○ あらゆる差別や偏見を許さず、なくしていこうとする。 ○ 自他の違いを認め、尊重し、共に生きていく社会の実現を目指そうとする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 伝え合い分かり合うためのコミュニケーション能力 ○ 自他の人間関係を調整する能力 ○ 自他の要求を共に満たせる解決方法を見だし、それを実現させる能力

※ 太字は、本研究において、特に育成したい資質や能力である。

2 児童の人権に関する実態のとらえ方

(1) 人権に関する実態調査

研究を進めるに当たって、研究実践学校の第6学年の児童の人権に関する実態を把握するために、人権教育の内容（「人権尊重に関する正しい知識」「人権尊重に関する望ましい価値観」「よりよい人間関係をつくるための技能」）について調査を行った。

質問項目は、生命尊重、自己理解・自尊感情、自他の違いを認める態度、コミュニケーション能力、自他の人間関係を調整する能力など、「人権教育指導資料」－小学校展開例－に示された小学校の内容項目（高学年）を基に作成した。下の【表1】は、全20問（知識11問、価値観3問、技能6問）で構成されている調査の質問項目と結果の一部を示したものである。

【表1 人権に関する実態調査の内容と結果】

[回答の仕方] 1よく 2だいたい 3あまり 4ぜんぜん

内容	No.	質問	1	2	3	4
知識	1	自分も他の人も、人として大切にされなければならないと思いますか？	15	12	0	0
	2	自分や他の人の生命は、かけがえのないものであると思いますか？	14	13	0	0
	3	自分には、可能性や能力・適性があると思いますか？	3	14	7	3
価値観	12	生命が尊いものだと感じ、自分や他の人の生命を尊重していますか？	12	15	0	0
	13	だれに対しても、差別をしたり決めつけた見方をすることなく、公正、公平にしていますか？	1	13	12	1
	14	自分や他の人の違いを認め、お互いに協力し合って、差別のない学級をつくらうとしていますか？	5	11	9	2
技能	16	自分も相手も大切にしたい自己表現ができますか？	4	12	10	1
	17	自分の言動を振り返ることができますか？	3	13	10	1
	18	相手のよさが分かるとともに、その人の立場になって考えることができますか？	6	12	8	1

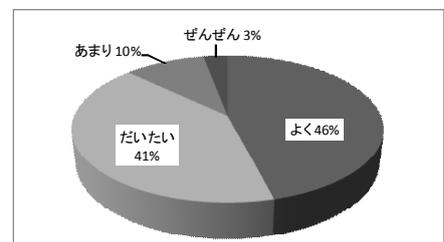
(2) 実態調査の結果と考察

下の【図1】から【図3】は、3つの内容ごとに集計結果をグラフに表したものである。

ア 人権尊重に関する正しい知識について

【表1】の設問1「自分も他の人も、人として大切にされなければならないと思いますか。」や、設問2「自分や他の人の命は、かけがえのないものであると思いますか。」では、「あまり」「ぜんぜん」と回答した児童がいないことから、人権の大切さや生命尊重に対して理解していることが分かる。しかし、設問3「自分には、可能性や能力・適性があると思いますか。」の結果から、自分自身の力を信じたり自信がもてなかったりしていることが分かる。

右の【図1】は、【表1】の知識に関する結果をグラフに表したものである。この【図1】のグラフを見ると、「よく」「だいたい」を合わせて87%に達していることから、知識については、概ね理解していると言える。



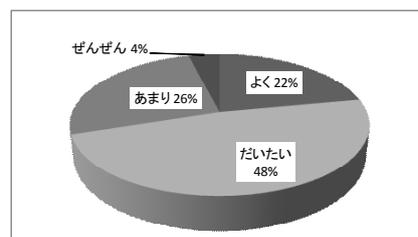
【図1 知識】

イ 人権尊重に関する望ましい価値観について

【表1】の設問12「生命が尊いものだと感じ、自分や他の人の生命を尊重していますか。」では、「あまり」「ぜんぜん」と回答した児童がいないことから、生命尊重に対する認識が深く、生命を尊ぶ心をもっていると言える。しかし、設問13「だれに対しても、差別をしたり決めつけた見方をしたりすることなく、公正、公平にしていますか。」や設問14「自分や

他の人の違いを認め、お互いに協力し合って、差別のない学級をつくろうとしていますか。」については、「よく」と回答した児童が少ないことから、公正、公平に接したり自分や他の人との違いを認めたりする態度が十分に育成されているとは言えない。

右の【図2】は、前頁の【表1】の価値観に関する結果をグラフに表したものである。この【図2】のグラフを見ると、「よく」「だいたい」を合わせると70%に達していることから、価値観については、全体的に概ね育っていると言える。

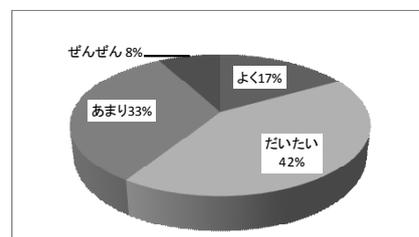


【図2 価値観】

ウ よりよい人間関係をつくるための技能について

前頁の【表1】の設問16「自分も相手も大切にしたい自己表現ができますか。」と設問17「自分の言動を振り返ることができますか。」の結果から、相手の立場に立って自分の気持ちや考えを伝えたり、自分の言動を振り返ったりする技能は十分に身に付いていないと言える。

右の【図3】は、前出の【表1】の技能に関する結果をグラフに表したものである。この【図3】のグラフを見ると、「あまり」「ぜんぜん」と回答している児童が41%を占め、それに対して、「よく」と回答している児童が17%しかいないことから、よりよい人間関係をつくるための技能を十分に身に付けているとは言えない。



【図3 技能】

エ 考察

これらの結果から、本学級の児童の人権に関する実態については、次のようなことが言える。人権尊重に関する正しい知識について、人権にかかわる概念や生命尊重、人間関係の在り方に関することは理解していると言える。しかし、人権尊重に関する望ましい価値観については、生命を尊ぶ心はもっているが、自他の違いを認める態度は十分に育っているとは言えない。また、よりよい人間関係をつくるための技能においては、コミュニケーション能力や人間関係調整力を十分に身に付けているとは言えない。特に、技能については、人間関係づくりには自信がもてない児童が多いことから、よりよい人間関係をつくるための技能を身に付けさせる手だてが必要ではないかと考える。

3 学級活動の内容(2)の年間指導計画の作成

(1) 学級活動の内容(2)と人権教育の内容との関連について

学級活動は、集団の中で自己を生かし、日常生活を営むために必要な行動の仕方を身に付けるなど、健全な生活態度の育成にかかわる活動である。そして、学級活動の内容(2)「日常生活や学習への適応及び健康や安全に関すること。」の活動内容には、次のようなものがある。

希望や目標をもって生きる態度の育成、基本的な生活習慣の形成、望ましい人間関係の育成、学校図書館の利用、心身ともに健康で安全な生活態度の形成、学校給食と望ましい食習慣の形成

特に、望ましい人間関係の育成に関しては、人権尊重に関する正しい知識を習得させ、人権尊重に関する望ましい価値観を育てるとともに、よりよい人間関係をつくるための技能を身に付けさせることにした。そこで、学級活動の内容(2)において指導の充実を図るために、人権尊重にかかわる題材を重点的に取り上げ、人権教育の内容を年間指導計画に位置付けた。

(2) 望ましい人間関係の育成を目指した題材配列の工夫

題材を配列するに当たって、指導する内容や時期、時間などを検討した。さらに、道徳の時間との関連や学校行事等との関連、人権教育の内容との関連などを明確にした。

下の【表2】は、学級活動の題材及びねらい、道徳の時間の主題及びねらい等を位置付けた、第6学年の学級活動の内容(2)望ましい人間関係の育成に関する年間指導計画である。

【表2 学級活動の内容(2)望ましい人間関係の育成に関する年間指導計画】

学期	月	題材及びねらい（資料等）	道徳の時間との関連（資料等）	学校行事等との関連
1	4	<p>「勇氣ある行動」</p> <p>人の心を傷つける言動が、どんなに相手を苦しめることになるのかを考えさせ、いじめや差別に対しては勇氣をもって立ち向かっていこうとする態度をとることができる。</p> <p>（出典【はぐくむ】）</p> <p>人権教育の主な内容：価値観②</p>	<p>「差別のない社会へ」</p> <p>4－(3)だれに対しても差別することや偏見をもつことなく公正、公平にし、正義の実現に努める。</p> <p>（出典【人権教育指導資料】）</p> <p>人権教育の内容との関連：知識⑦a</p>	<p>始業式</p> <p>修学旅行</p>
	7	<p>「わたしはこう思う」</p> <p>相手の立場に立って気持ちや考えを理解し、アサーティブな自己表現で、相手に自分の気持ちや考えを伝えることができる。</p> <p>（参加体験型学習）</p> <p>人権教育の主な内容：技能①b</p>	<p>「自分を振り返る」</p> <p>1－(4)誠実に、明るい心で楽しく生活する。</p> <p>（出典【人権教育指導資料】）</p> <p>人権教育の内容との関連：技能②b</p>	<p>国際理解集会</p> <p>水泳教室</p> <p>終業式</p>
2	9	<p>「わたしが選んだ理由」</p> <p>相手の考えを尊重しながら聴き、多様な考えがあることに気付くとともに、自分との考えの違いを認めることができる。</p> <p>（参加体験型学習）</p> <p>人権教育の主な内容：技能②b</p>	<p>「相手の立場を考えて」</p> <p>2－(4)謙虚な心を持ち、広い心で自分と異なる意見や立場を大切に</p> <p>する。</p> <p>（出典【人権教育指導資料】）</p> <p>人権教育の内容との関連：技能②c</p>	<p>始業式</p> <p>運動会</p> <p>陸上教室</p>
	12	<p>「自分や友達よさに気付く」</p> <p>これまでに成長した自分に気付くとともに、友達に認められている自分の存在に気付くことができる。</p> <p>（参加体験型学習）</p> <p>人権教育の主な内容：知識③a</p>	<p>「男女の助け合い」</p> <p>2－(3)互いに信頼し、学び合って友情を深め、男女仲よく協力し助け合う。</p> <p>（出典【学研】）</p> <p>人権教育の内容との関連：知識④a</p>	<p>今町っ子まつり</p> <p>（学習発表会）</p> <p>終業式</p>
3	2	<p>「H I V感染者等への思いやり」</p> <p>エイズに対する誤った考え方があることを知り、差別や偏見をもたないで、お互いに思いやり助け合っていこうとすることができる。</p> <p>（出典【人権教育指導資料】）</p> <p>人権教育の主な内容：知識⑦b</p>	<p>「生命の力」</p> <p>3－(2)生命がかけがえのないものであることを知り、自他の生命を尊重しようとする。</p> <p>（出典【文溪】）</p> <p>人権教育の内容との関連：知識②</p>	<p>避難訓練</p> <p>学校保健委員会</p>
	3	<p>「みんなのために」</p> <p>学校や地域社会の人々の公共心あふれる行動に共感し、自分から進んでみんなのために尽くそうとすることができる。</p> <p>（出典【はぐくむ】）</p> <p>人権教育の主な内容：価値観③a</p>	<p>「人の真心」</p> <p>2－(2)思いやりの心を持ち、よく考え、相手の立場に立って接しようとする。</p> <p>（出典【学研】）</p> <p>人権教育の内容との関連：技能②b</p>	<p>お別れ遠足</p> <p>卒業式</p>

ア 道徳の時間との関連

道徳の時間の主たるねらいは、道徳的価値の自覚を深め、道徳的実践力を育成することであり、内容項目には、人権教育の学習内容と関連するものが多く含まれている。特に、生命尊重、個性伸長、公正・公平、友情、権利・義務などの内容に関わる学習を通じて、人権問題を直感的にとらえる感性や人権への配慮が態度や行動に現れるような実践力を育成できる。

イ 学校行事等との関連

学校行事では、互いに協力して活動することによって、所属感、一体感が深められる。また、集団行動における望ましい態度が養われる。学校行事等における体験的な活動を通して豊かな心を育てることは、人権教育の目標に結び付くものである。

ウ 人権教育の内容との関連

学級活動の授業のねらいに迫るために、下の【表3】のような人権教育の内容項目を基に適切な学習方法を選択し、手だてを考えた。

具体的な手だてとして、参加体験型学習を位置付けたり、文章教材を活用したりする。下の【表3】は、前頁の【表2】にかかわる人権教育の内容について、「人権教育指導資料」に示されている小学校の内容項目表から一部を抜粋したものである。

【表3 人権教育の内容項目表】

内容	記号	項目	高学年
知識	③ a	自己理解・自尊感情	自分の可能性や能力・適性に気付く。
	⑦ b	様々な人権課題	身近な生活の中の差別や偏見の不合理性を知り、一人一人が尊重される社会の実現を目指すことの大切さを知る。
価値観	②	非差別	だれに対しても差別をすることや偏見をもつことなく、公正、公平にし、正義の実現に努める。
	③ a	多様性・多文化共生	違いを認め、個性を尊重し、互いに協力し合って、差別のない共に生きる社会をつくっていかうとする。
技能	① b	コミュニケーション能力	自分も相手も大切にしたい自己表現ができる。
	② b	人間関係調整力	相手のよさが分かるとともに、その人の立場に立って考えることができる。

4 指導方法の工夫

(1) 指導方法の基本的な考え方

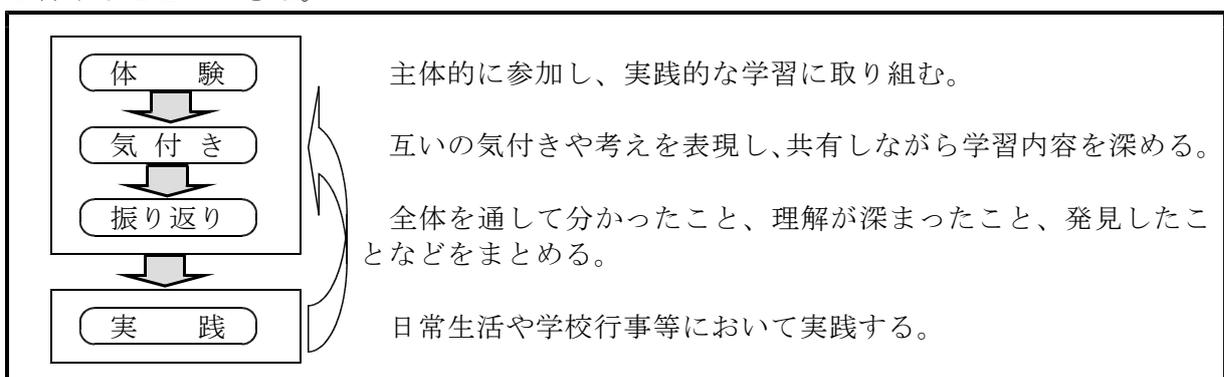
人権尊重に関する望ましい価値観や、よりよい人間関係をつくるための技能は、知識を教えるだけで身に付くものではない。児童が自ら主体的に、しかも学級の他の児童とともに学習活動に参加し協力的に活動し、体験することを通して身に付くものである。

人権尊重に関する資質や能力を育成するためには、児童が、自分で考え、感じ、活動するような主体的、実践的な学習に取り組ませることが大切である。

(2) 参加体験型学習の効果

参加体験型学習は、具体的な活動や体験を通して、身をもって学ぶことができ、生きた知識や技能を身に付ける学習である。⁴⁾しかし、体験的な活動を取り入れるだけで学習のねらいが達成できるものではなく、活動を系統的に位置付けたり、事前・事後指導の工夫をしたりすることが大切である。

下の【図4】は、体験的な学習のサイクルを示したものである。「気付き」「振り返り」「実践」といった段階を計画することによって、体験した事柄を内面化、さらに、自己変容へと結び付けることができる。



【図4 体験的な学習のサイクル】

5 検証授業 I

(1) 事前調査から

前出の【表1】に示した児童の人権に関する実態調査の結果から、本学級の児童は、コミュニケーション能力や人間関係調整力が十分に身に付いていないことが明らかになった。これらを解決するために、よりよい人間関係をつくるための技能を身に付けさせる手だてが必要であると考えた。

そこで、さらにコミュニケーション能力に関する実態を詳しく把握するために、自分の言いたいことや気持ちを表現することについて調査を実施した。下の【表4】は、その内容と結果を示したものである。

【表4 事前調査の内容と結果】

[回答の仕方] 1よく 2だいたい 3あまり 4ぜんぜん

No.	質 問	1	2	3	4
1	相手に、自分の言いたいことや気持ちを伝えたいと思いますか。	8	9	10	0
2	相手に、自分の言いたいことや気持ちを伝えることができますか。	3	15	9	0
3	相手に、自分の言いたいことや気持ちが伝わりますか。	2	18	7	0
4	相手に、自分の言いたいことや気持ちが伝わるとうれいですか。	8	10	7	2
5	自分の言いたいことや気持ちが伝わらずに、相手をおこらせたことがありますか。	1	7	16	3
6	自分の言いたいことや気持ちが伝わらないときに、原因を考えたことがありますか。	2	8	10	7
7	自分の言いたいことや気持ちを伝えるときに、相手のことを考えていますか。	2	13	9	3
8	あなたに、相手の言いたいことや気持ちが伝わりますか。	5	16	6	0
9	相手の言いたいことや気持ちが伝わらずに、あなたがおこったことがありますか。	2	12	11	2
10	相手に自分が言いたいことや気持ちが伝えられる技能を身に付けたいと思いますか。	9	6	10	2

【表4】を見ると、設問2「相手に、自分の言いたいことや気持ちを伝えることができますか。」や、設問3「相手に、自分の言いたいことや気持ちが伝わりますか」では、「よく」「だいたい」と回答した児童は、それぞれ18名と20名であった。このことから、多くの児童は、自分の言いたいことや気持ちが伝わっていると思っていると言える。

しかし、設問5「自分の言いたいことや気持ちが伝わらずに、相手を怒らせたことがありますか。」では、「よく」「だいたい」と回答した児童は8名であるのに対して、設問9「相手の言いたいことや気持ちが伝わらずに、あなたがおこったことがありますか。」では、「よく」「だいたい」と回答した児童は14名であった。このことから、自分が相手を怒らせたことに気付いていない児童がいるのではないかと考えられる。

そこで、相手の心情や立場を大切にしながら自分の思いや考えを伝える表現の仕方を身に付けさせる必要があると考え、参加体験型学習を活用してアサーティブな自己表現を身に付ける学習に取り組み、よりよい人間関係をつくるための技能を身に付けさせることにした。

(2) 検証授業 I の実際

ア 学習指導案

1	題 材	「わたしはこう思う」		
2	ねらい	○ 相手の立場に立って気持ちや考えを理解し、アサーティブな自己表現で相手に自分の気持ちや考えを伝えることができる。		
3	展開の過程	○ 帰りの会を利用して、友達同士の言葉遣いについて一日の生活を振り返らせ、言葉に着目させることにより本時と関連付けるようにする。		
事前	段階	学習内容及び学習活動	指導上の留意点	資料・準備
	1	アイスブレイキングをして、感想を発表する。	・ 緊張感をほぐし、主体的に参加できる雰囲気をつくる。	シール

授 業	導 入	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「同じシール集まれ」 <p>2 自己表現の仕方を知るとともに、本時の学習課題を把握する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 攻撃的な自己表現、非攻撃的な自己表現、非主張的な自己表現 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content;">相手の立場になって、自分の気持ちが伝えられるようになる。</div>	<ul style="list-style-type: none"> ・ コミュニケーションの手段として使用している言葉の働きを考えさせる。 ・ 攻撃的、非主張的な自己表現の問題点や、非攻撃的な自己表現のよさに気付かせるとともに、自分の表現の仕方についても考えさせる。 ・ 自分の言いたいことを主張することが大切なことを確認する。 	
	展 開	<p>3 例題について考え、自分が選んだ表現について発表する。</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; width: fit-content;">水を飲む順番を待って並んでいました。すると、A君が割り込んできました。</div>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 3つの表現パターンの中から自分の表現の仕方を選ばせ、どの表現の仕方がいいのか考えさせる。 ・ 「わたし」を主体として、相手を尊重しながら自分の言いたいことを伝えるよさに気付かせる。 	ワークシート
		<p>4 事例について考え、ロールプレイングを活用して発表する。</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; width: fit-content;">隣に座っているBさんが、黙って消しゴムを使いました。</div>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「わたし」メッセージになっているか確認するとともに、伝えるときに、気を付けたことを発表させる。 ・ 言われた方の気持ちを発表させ、自分が大切にされていると感じたか、本人と聞いていた児童にも確認する。 	ワークシート
	終 末	<p>5 例題づくりをする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 学校での場面 ○ 家庭での場面 <p>6 本時の感想を交流し、まとめる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学校や家庭で問題が起こりそうな場面を想定させ、身近な出来事であることに気付かせるとともに、解決方法についても考えさせる。 ・ 本時の学習を振り返らせ、分かったこと、理解したこと、気付いたことを発表させる。 ・ 「わたし」メッセージのよさについて確認し、日常生活の中で生かすよう意欲をもたせる。 	ワークシート
事 後	<ul style="list-style-type: none"> ○ 帰りの会を利用して、事例を想定させたりアサーティブな自己表現を考えさせたりする。 ○ 学級通信で本時の様子を話題に取り上げ、保護者にもアサーティブな自己表現のよさを知らせ、家庭とも連携を図りながら技能の定着を目指す。 			

イ 考察

(7) 導入

児童の緊張感をほぐし、主体的に参加できる雰囲気づくりをするために、アイスブレイキングとして「同じシール集まれ」に取り組んだ。「同じシール集まれ」は、言葉以外のコミュニケーションがあることに気付かせる活動である。活動後の感想の中に「言葉を使わないと難しい」「ジェスチャーだけだと伝わらない」などがあったことから、コミュニケーションの手段としての言葉の働きについて気付かせることができたと考える。

さらに、事前指導で言葉遣いを取り上げ本時と関連させたことにより、アサーティブな自己表現の仕方に焦点を当て、ねらいへの方向付けを図ることができた。

(イ) 展開

はじめに、「水を飲む順番を待って並んでいました。すると、A君が割り込んできました。あなたなら何と言いますか。」という例題を提示した。そして、次頁の【表5】にある3つの表現パターンを使い、自分の表現について考えさせた。すると、ほとんどの児童が、自分の表

現が「あなたメッセージ」になっていることに気付いた。

次に、「隣に座っているBさんが、黙って消しゴムを使いました。」という事例を基に、「わたしメッセージ」について考えさせた。この事例では、ほとんどの児童が、「わたしメッセージ」を使って表現することができていた。その後、ロールプレイングを活用して「わたしメッセージ」で伝える場合とそうでない場合の役割演技に取り組みさせた。そして、「あなたメッセージ」で言われたときの気持ちを発表させると、「むっとする」「腹が立つ」という意見が多かった。それに対して、「わたしメッセージ」で言われたときの気持ちを聞くと、「悪いことをしたなあ」「次から気を付けよう」という意見がほとんどであった。このように、「あなたメッセージ」と「わたしメッセージ」で言われたときの気持ちを考えさせることによって、「わたしメッセージ」のよさを感じさせることができた。

最後に、学校や家庭で「わたしメッセージ」を使うとよい場面を想定させた。場面として、順番や貸借のことを想定した児童が多かった。このように、「わたしメッセージ」が使えるような場面を想定させることによって、日常生活で生かせることに気付かせることができた。

【表5 自己表現の3つのパターン】

種 類	内 容
「あなたメッセージ」	相手の気持ちを考えず、自分の気持ちを優先させ、自分の言いたいことだけを言う。 (攻撃的な自己表現)
「わたしメッセージ」 アサーティブネス	相手の気持ちを大切にしながら、自分の言いたいことを主張する。 (非攻撃的な自己表現)
「なしメッセージ」	相手に対して自分の言いたいことを言えない。または、言わない。 (非主張的な自己表現)

(ウ) 終 末

本時の学習を振り返り、感想として気付いたことや分かったことをワークシートに書かせた。すると、下の【資料1】のような3つの意見に分類することができた。

<input type="checkbox"/> いつも「あなたメッセージ」を使っていたので、これからは、「わたしメッセージ」を使うようにしたい。
<input type="checkbox"/> 「わたしメッセージ」を使って、相手の気持ちを考えたり大切にしたりして、自分の気持ちを伝えてみたい。
<input type="checkbox"/> 「なしメッセージ」が多いので、「わたしメッセージ」を使ってみよう。

【資料1 振り返り（ワークシート）】

これらの感想から、本学級の児童に対して、今までの自分は「あなたメッセージ」になっていることに気付かせ、これからは、「わたしメッセージ」を使ってみようと、実践に向けて意欲をもたせることができたと考える。

前出の【表1】の実態調査の設問16「自分も相手も大切にしたい自己表現ができますか。」において、「ぜんぜん」と回答した児童が1名いた。その児童は、例題では、何も言わないか、誰かが言うのを期待する「なしメッセージ」であった。しかし、振り返りの感想では、今までは「なしメッセージ」であったが、次からは「わたしメッセージ」を使ってみようとしていたことから、「わたしメッセージ」のよさに気付かせることができたと考える。

ウ 事前及び事後指導の充実

(ア) 事前指導

帰りの会を利用して、事前に道徳の時間に学習した「自分を振り返る」（人権教育指導資料）で取り上げた読み物資料を基に、日頃の友達に対する言葉遣いについて振り返らせた。

その際に、言葉遣いを取り上げるようにし、本時では表現方法に焦点を当てるようにした。そうすることによって、本時では、自分も相手も大切にしたい自己表現について考えさせるというねらいが明確になった。

(イ) 事後指導

- 授業以外でも繰り返しの指導が必要と考え、帰りの会を利用して、アサーティブな自己表現が必要な場面を想定させた。すると、日常生活で起こりそうな場面として、トイレや歯みがきのとき、兄弟姉妹でゲームをするときなどを想定していた。

このように、「わたしメッセージ」を使うとよい場面を想定させたことによって、日常生活の多くの場面でアサーティブな自己表現が生かせることに気付かせることができた。

- 保護者にも、アサーティブな表現のよさに気付いてもらいたいと考え、学級通信を利用して、「わたしメッセージ」が使える場面があることを知らせた。下の【資料2】は、学級通信の一部である。

A : 夕食の支度をしていると、急に雨が降ってきました。子どもに、洗濯物を取り込むことをお願いしようとしたら、テレビゲームに夢中です。

B : 仕事から帰ると、玄関にランドセルが置いたままです。部屋から、テレビの音と笑い声が聞こえてきます。宿題は、まだ終わってないようです。

いつもだったら、何と言いますか？また、どのように言えば、素直に聞いてくれるのでしょうか？

【資料2 学級通信の利用】

保護者からの返信に、「つい大声で怒鳴ってしまう」「口答えしたことに怒ってしまう」ので、「お願いだから」などの言葉を付け足すことで子どもの反応が違ったというものがあった。また、「子どもが、弟や妹に親と同じ口調で話しているのを聞いて、反省した。」というものがあり、家庭でも実践しようという意識付けができたと考える。

(3) 事後調査から

前出の【表4】の事前調査を基に、事後調査を行った。検証授業Iにおける事前と事後での児童の意識を比較し、児童の変容について検証することにした。下の【表6】は、その内容と結果を示したものである。

【表6 事後調査の内容と結果】

[回答の仕方] 1よく 2だいたい 3あまり 4ぜんぜん

No.	質 問	1	2	3	4
1	相手に、自分の言いたいことや気持ちの伝え方が分かりましたか。	13	9	2	0
2	相手に、自分の言いたいことや気持ちを伝えたいと思いましたか。	12	5	7	0
3	相手に、自分の言いたいことや気持ちを伝えることができそうですか。	5	16	3	0
4	相手に、自分の言いたいことや気持ちが伝わらないときに、表現の仕方を変えますか。	8	9	7	0
5	友達だけではなく、家族にも自分の言いたいことや気持ちを伝えたいと思いますか。	7	9	7	1
<ul style="list-style-type: none"> ・ 「わたしメッセージ」を使うと、友達と仲よくなりそうなので使いたい。 ・ 「わたしメッセージ」を使う自信はないけど、使った方がいいと思った。 ・ 「わたしメッセージ」は、いつも心掛けないとなかなか使えない。 ・ 相手に、自分の気持ちが伝えられるようになりたい。 					

【表6】より、設問1「相手に、自分の言いたいことや気持ちの伝え方が分かりましたか。」や、設問2「相手に、自分の言いたいことや気持ちを伝えたいと思いましたか。」で「よく」と回答した児童は、それぞれ13名と12名であった。

また、前出の【表4】の設問3「相手に、自分の言いたいことや気持ちを伝えることができそ

うですか。」では、「あまり」と回答した児童が9名であったが、今回の調査では3名であった。そして、前出の【表4】の設問6「自分の言いたいことや気持ちが伝わらないときに、原因を考えたことがありますか。」では、「あまり」「ぜんぜん」と回答した児童が17名であったが、前頁の【表6】の設問4「相手に、自分の言いたいことや気持ちが伝わらないときに、表現の仕方を変えますか。」では、「あまり」「ぜんぜん」と回答した児童は7名に減少した。

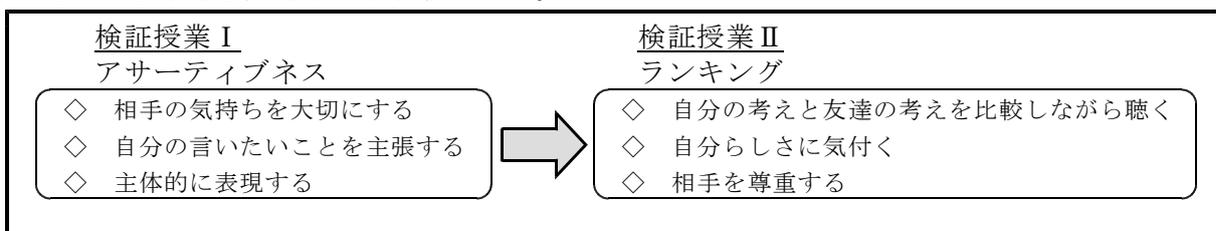
これらのことから、アサーティブな自己表現のよさを理解し、日常生活においてもその表現を使うことに意欲をもたせることができたと考える。

6 検証授業Ⅱ

(1) 検証授業Ⅰと検証授業Ⅱとの関連

検証授業Ⅰでは、コミュニケーション能力を身に付けさせるために、アサーティブな自己表現について学習した。その結果、アサーティブな表現のよさを理解し、日常生活においても使うことに意欲をもたせることができた。

検証授業Ⅱでは、相手の考えを尊重しながら聴く態度を身に付けさせるとともに、自分との考えの違いや多様な考えがあることに気付かせ、それを認めることができる態度を育成することにした。その際に、児童が検証授業Ⅰで学習したアサーティブな自己表現を生かして、自分の気持ちや考えを伝えさせるようにした。



【図5 検証授業Ⅰと検証授業Ⅱとの関連】

(2) 事前調査から

検証授業Ⅱは、よりよい人間関係をつくるための技能の一つである自他の人間関係を調整する能力の育成をねらいとしている。人間関係を調整するには、相手の考えを尊重しながら聴いたり、違いを認めたりすることが必要である。

そこで、自分と相手の思いや考えが違うことを理解したり、違いを認めたりすることについての児童の実態を把握するために、下の【表7】のような調査を実施した。【表7】は、その内容と結果を示したものである。

【表7 事前調査の内容と結果】

		[回答の仕方] 1よく 2だいたい 3あまり 4ぜんぜん			
No.	質 問	1	2	3	4
1	相手に、自分の考えや気持ちを分かってもらいたいと思いますか。	9	10	7	0
2	相手に、自分の考えや気持ちを分かっていますか。	4	17	4	1
3	相手に、自分の考えや気持ちを分かろうとうれしいですか。	10	8	6	2
4	相手は、あなたの考えや気持ちを聴いてくれますか。	9	15	2	0
5	相手は、あなたの考えや気持ちを認めてくれますか。	8	14	4	0
6	あなたは、相手の考えや気持ちを聴いていますか。	10	10	6	0
7	あなたは、相手の考えや気持ちが分かりますか。	4	15	6	1
8	あなたは、相手の考えや気持ちが分からないとき、分かってあげようとしていますか。	12	9	4	1
9	あなたは、自分と相手の考えや気持ちがちがうとき、相手の考えや気持ちを認めていますか。	4	16	5	1
10	あなたは、自分と相手の考えや気持ちがちがうとき、『ちがう』で終わらずに、理解しようと思いますか。	4	16	5	1

前頁の【表7】を見ると、設問4「相手は、あなたの考えや気持ちを聴いてくれますか。」と設問6「あなたは、相手の考えや気持ちを聴いていますか。」では、「よく」と回答した児童が、それぞれ9名と10名いた。それに対して、設問2「相手に、自分の考えや気持ちを分かってもらっていますか。」と設問7「あなたは、相手の考えや気持ちが分かりますか。」では、「よく」と回答した児童が、それぞれ4名であった。このことから、お互いに考えや気持ちを聴いたり聴いてもらったりしていると思っているが、分かたり分かてもらったりしているとは感じていないことが分かる。

設問5「相手は、あなたの考えや気持ちを認めてくれますか。」では、「よく」と回答している児童は8名いたのに対して、設問9「あなたは、自分と相手の考えや気持ちがちがうとき、相手の考えや気持ちを認めていますか。」では、「よく」と回答した児童は4名であった。このことから、考えや気持ちを認めることについては、相手には認めてもらっていると感じているのに対し、自分と考えや気持ちが違うときには、相手のことを積極的に認めたり理解しようとしたりする児童が少ないと言える。

以上のことから、相手の考えを尊重しながら聴く態度を身に付けさせるとともに、自分との考えの違いや多様な考えがあることに気付かせ、それを認めることができる態度を育成する必要があると考えた。

(3) 検証授業Ⅱの実際

ア 学習指導案

1 題材 「わたしが選んだ理由」			
2 ねらい			
○ 相手の考えを尊重しながら聴き、多様な考えがあることに気付くとともに、自分との考えの違いを認めることができる。			
3 展開の過程			
事前	○ 「こんな権利あったらいいな」アンケートを実施し、自分が欲しいと思う権利を考えさせることにより、権利に興味をもたせるとともに本時と関連付けるようにする。		
	段階	学習内容及び学習活動	指導上の留意点
導入	1	「こんな権利あったらいいな」で、権利を考えた時の気持ちを話し合う。	<ul style="list-style-type: none"> 事前のアンケートから、友達の考えた権利を紹介し、自分と違う考えがあることに気付かせる。 選ばれなかった権利についても紹介し考えのよさを称賛する。 権利の意味を理解させ、「権利の熱気球」につなげるようにする。 相手と違う考えを話すときの気持ちを考えさせる。 友達の考えをうなずきながら聴き、相手が話しやすい雰囲気大切であることを助言する。
	2	権利の意味について話し合う。	
3	本時のめあてを確認する。 自分の考えと友達の考えのちがいをはっきりさせながら聴き、自分の考えを伝えましょう。		
授	4	「権利の熱気球」について説明を聞く。 6つの荷物とともに、熱気球に乗っています。・・・、荷物を捨てましょう。	<ul style="list-style-type: none"> 熱気球の写真を提示し、「権利の熱気球」への興味を高める。 荷物が権利であることを話し、権利について理解させる。 友達の考えと違っていてもよいことを確認し、話しやすい雰囲気づくりをする。
	5	「権利の熱気球」に取り組み、最初に捨てた権利について話し合う。	
展			資料・準備
			写真
			ワークシート

業	○ 一斉 ○ グループ	<ul style="list-style-type: none"> グループで、友達の捨てた理由を聴きながら、友達の考えを理解できたか確認する。 友達がどんな順番で捨てているかを確認し、自分との違いに気付かせる。 自分にとっては、捨てたくない権利であることを確認し、その理由を相手に分かってもらうためには、何が大切なのか考えさせる。 	
	6 2～4番目に捨てた権利について話し合う。 7 最後まで残した権利について話し合う。		
終末	8 本時の感想を交流し、まとめる。	<ul style="list-style-type: none"> 本時の学習を振り返らせ、分かったこと、理解したこと、気付いたことを発表 	ワークシート
事後	○ 人権コーナーに「子どもの権利条約」を掲示し、権利について理解を深めさせるとともに、人権に対して興味・関心をもたせるようにする。		

イ 考察

(7) 導入

事前指導で行った「こんな権利あったらいいな」アンケートで、自分が欲しい権利を考えたときのことを想起させながら、本時で取り上げる6つの権利を紹介した。自分たちが考えた権利が選ばれたことにより、自分と友達の考えを共有することができた。

また、めあてを確認する際に、聴くという言葉に着目させ、聞くとの違いについて考えさせた。さらに、うなずきながら聴くことで相手が話しやすい雰囲気をつくるのが大切なことを説明して展開の活動につなげた。

(イ) 展開

参加体験型学習の手法の一つであるランキングを活用した、「権利の熱気球」に取り組むことにした。

ランキングは、様々なテーマについて権利や具体的物品名等をカードに記入し、参加者が自分にとって重要と考える順序にランキング（順位付け）して、その根拠等を整理し、結果について参加者相互が意見交換や討議を行う。討議のプロセスでは、一つの結果を導き出すというのではなく、自分の考えを整理したり、他者の考えを理解したりすることによって、自分自身の認識を深めることができる。⁴⁾

「権利の熱気球」は、熱気球で6つの荷物を運ぶが、次第に高度が下がるために荷物に例えた権利を順に捨てなければならなくなったという設定である。はじめに、最初の権利（荷物）を捨てたところで、2名の児童に権利を捨てた理由を発表させ、自分の考えと比べながら聴くようにした。捨てる権利を選んだ理由の違いから、多様な考えや考え方の違いに気付かせることができた。

次に、各グループで、2番目から5番目に捨てた権利について話し合わせ、友達の考えを聴くだけでなく、自分が権利を捨てた理由を発表させた。少人数であったので、発表を苦手に行っている児童も自分の考えを伝えることができた。

最後に、自分が最も捨てたくなくて残した権利について、残した理由を話し合わせた。友達が最後まで残した理由を聴きながら、自分の考えを発表する児童の姿が多く見られた。中には、どれも捨てられないという考えの児童がいたので、その考え方も尊重するように助言した。また、単に違いに気付くだけでなく、相手が自分の考えを分かってくれたと思うときはどんなときかを考えさせ、話しやすい雰囲気づくりをすることの大切さについても話し合わせた。

(ウ) 終 末

本時の学習を振り返らせ、気付いたことや分かったことをワークシートに書かせた。下の【資料3】は、ワークシートに記入された感想の一部を示したものである。

- ・ 仲のいい友達でも、それぞれちがうんだなと思いました。まったくいっしょの人は、ほんの少ししかいないと思いました。
- ・ 選んだ順番は同じでしたが、理由は全然ちがいました。相手の気持ちをもっと知りたいと思いました。
- ・ 自分と同じ順番で捨ててる人がいたけど、自分なりに捨てているんだなと感じました。この授業で班の人に自分の気持ちを伝えることができてよかったです。
- ・ 一人一人ちがう考え方があることが分かりました。私が一番大切な権利だと思うものを最初に捨てている人がいて、いろいろな考え方があることにも気付きました。これからは、相手の考えをしっかりと聴いて、「どうしてだろう」と考えていくことが大事だと思います。
- ・ 友達が、自分の意見を分かってくれたのでうれしかったです。

【資料3 振り返り（ワークシート）】（原文のまま）

これらの感想から、自分と考えが違う人が多くいることや、多様な考え方があることに気付かせることができた。また、相手の考えを認めることができただけでなく、自分の考えを伝えることができてよかったと感じている児童がいることが分かった。多くの児童が同様の感想を書いていることから、それぞれの思いや考え方が違うことを理解させることができたと考ええる。また、「自分の意見を分かってくれたのでうれしかった」という感想から、自分の考えや気持ちを分かってもらったときの喜びを味わわせることができたと言える。

ウ 事前及び事後指導の充実

(ア) 事前指導

授業で扱う権利について、児童に「こんな権利あったらいいな」アンケートを実施し、自分が欲しいと思う権利を一人につき5つ書かせた。それを集約し、数の多い順に次の6つを選んだ。

宿題をしなくてもよい権利、いつでも・いつまでも遊んでよい権利、怒られない権利、欲しい物が手に入る権利、学校に行かなくてもよい権利、いじめられない権利

6つを選んだ理由は、自分で5つの権利を考えたので、最低1つは友達が考えた権利が入るようにするためである。児童に権利を考えさせたことにより、導入段階で友達が考えた権利を紹介することができ、友達の多様な考えに触れさせることができた。

また、権利という言葉の意味について考えさせたり、身近なものとして親しみをもたせたりすることができた。さらに、権利が大切なものであると感じさせるとともに、これから社会科で学習することを伝え、関心をもたせることができた。

(イ) 事後指導

右の【資料4】のように、背面黒板を利用して人権コーナーを設置し、授業の終末で使用した資料「子どもの権利条約」を掲示した。そして、掲示後には、朝の会で人権に関するクイズを行った。このように、掲示するだけでなくクイズにしたことによって、学習内容を振り返ったり、今後学習する内容につなげたりすることができた。



【資料4 背面黒板の利用】

(4) 事後調査から

前出の【表7】の事前調査を基に、事後調査を行った。検証授業Ⅱにおける事前と事後での児童の意識を比較し、児童の変容を検証した。下の【表8】は、その内容と結果を示したものである。

【表8 事後調査の内容と結果】

No.	質 問	[回答の仕方] 1よく 2だいたい 3あまり 4ぜんぜん			
		1(事前)	2(事前)	3(事前)	4(事前)
1	相手に、自分の考えや気持ちを分かってもらいたいと思いませんか。	11(9)	13(10)	2(7)	0(0)
2	相手に、自分の考えや気持ちを分かってもらいましたか。	4(4)	19(17)	1(4)	2(1)
3	相手に、自分の考えや気持ちを分かってもらってうれしかったですか。	11(10)	10(8)	5(6)	0(2)
4	相手は、あなたの考えや気持ちを聴いてくれましたか。	10(9)	13(15)	2(2)	1(0)
5	相手は、あなたの考えや気持ちを認めてくれましたか。	6(8)	17(14)	1(4)	2(0)
6	あなたは、相手の考えや気持ちを聴きましたか。	11(10)	14(10)	1(6)	0(0)
7	あなたは、相手の考えや気持ちが分かりましたか。	5(4)	17(15)	4(6)	0(1)
8	あなたは、相手の考えや気持ちが分からないとき、分かってあげようと思いましたか。	7(12)	13(9)	6(4)	0(1)
9	あなたは、自分と相手の考えや気持ちがちがうとき、相手の考えや気持ちを認めましたか。	9(4)	12(16)	5(5)	0(1)
10	これからは、自分と相手の考えや気持ちがちがうとき、『ちがう』で終わらずに、相手のことを理解しようと思いませんか。	9(4)	13(16)	4(5)	0(1)

【表8】より、設問9「あなたは、自分と相手の考えや気持ちがちがうとき、相手の考えや気持ちを認めましたか。」と、設問10「これからは、自分と相手の考えや気持ちがちがうとき、『ちがう』で終わらずに、相手のことを理解しようと思いませんか。」では、「よく」と回答した児童が4名から9名に増加したことが分かった。また、「ぜんぜん」と回答した児童がいなくなったことも分かった。このことから、自分と相手の考えや気持ちが違うときに、自分との違いを認めたり理解しようとしたりすることができるようになってきたと言える。

しかし、設問8「あなたは、相手の考えや気持ちがわからないとき、分かってあげようと思いましたか。」では、「よく」と回答した児童が12名から7名に減少した。その理由として、今の自分が、分かってあげようとするに不十分であることに気付いたからではないかと考えられる。

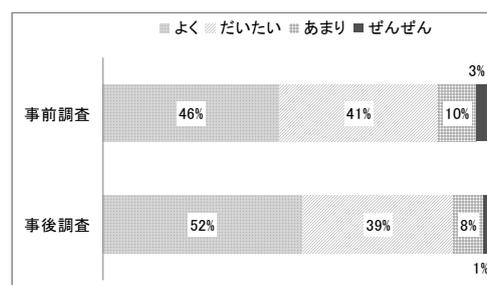
7 児童の人権に関する実態調査等

5月に実施した人権に関する実態調査に基づいて、10月にも同様の内容で調査を実施した。さらに、検証授業で学習したことが、日常生活において実践できたかどうかのアンケート調査を行った。それらの結果から、学級の児童の人権に関する実態の変容を見ることにした。

(1) 実態調査の結果と考察

ア 人権尊重に関する正しい知識について

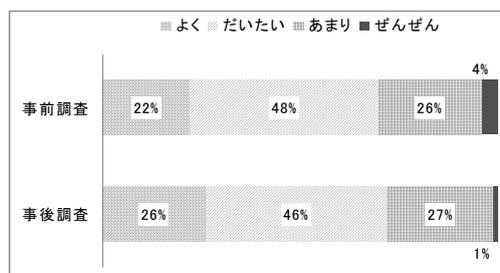
右の【図6】は、人権尊重に関する正しい知識についての変容を示したもので、次のような結果が得られた。「よく」と回答した児童の割合が、6%増加し半数を超えた。「だいたい」「あまり」と回答した児童の割合は、わずかではあるが、それぞれ2%ずつ減少した。



【図6 知識の変容】

イ 人権尊重に関する望ましい価値観

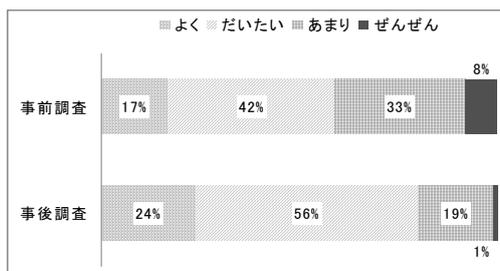
右の【図7】は、人権尊重に関する望ましい価値観についての変容を示したものである。「よく」と回答した児童の割合が4%増加し、「だいたい」と回答した児童の割合は2%減少した。「あまり」と回答した児童の割合は、あまり変化が見られなかった。価値観については、全体的にあまり変容がみられなかった。



【図7 価値観の変容】

ウ よりよい人間関係をつくるための技能

右の【図8】は、よりよい人間関係をつくるための技能の変容を示したもので、次のような結果となった。「よく」と回答した児童の割合は7%、「だいたい」と回答した児童の割合は14%増加した。「あまり」と回答した児童の割合が14%減少した。これらのことから、技能については、変容があったとみることができる。



【図8 技能の変容】

エ 考察

技能は変容が明らかになったが、知識と価値観では、あまり大きな変容が見られなかった。その理由として、本学級の児童は、人権に関する実態調査の結果から、技能の定着が課題であるととらえ、検証授業を中心に技能に重点を置いて指導してきたからではないかと考えた。

技能については、2回の検証授業を通して、アサーティブな自己表現で相手に自分の気持ちや考えを伝えたり、相手の考えを尊重しながら聴くとともに、考えの違いを認めたりする態度を育成できたと考える。

知識と価値観については、あまり大きな変容が見られなかったものの、「よく」と「だいたい」と回答した児童の割合が、わずかではあるが増加しているため、まったく変容がなかったということではない。

(2) 実践の振り返りアンケートの結果と考察

7月と9月に行った2回の検証授業を終えて、授業で学習した内容をこれまでに日常生活で実践できたかを調査するため、12月に下の【資料5】のようなアンケートを実施した。下の【資料5】は、そのアンケートの一部である。

ふり返しアンケート		名前()
1	『わたしメッセージ』と『権利の熱気球』で学習したことが、役に立ちましたか？ たいへん ・ だいたい ・ あまり ・ ぜんぜん	
2	1で、「たいへん」「だいたい」役に立ったと答えた人に聞きます。 ◇『わたしメッセージ』が、どんな場面で役に立ちましたか？ ◇『権利の熱気球』が、どんな場面で役に立ちましたか？	
3	1で、「あまり」「ぜんぜん」役に立たなかったと答えた人に聞きます。 ★ <u>どうして、役に立たなかったのですか？</u> 使う場面がなかった ・ 使い方が分からなかった ・ 使おうと思わなかった ・ 忘れていた ★ <u>これから先、役に立つと思いますか？</u> 役に立つことがある ・ 少しは役に立つことがある ・ ぜんぜん役に立たない	

【資料5 振り返りアンケート】

前頁の【資料5】の設問1では、6割以上の児童が「たいへん」「だいたい」と回答していた。設問2では、役に立った場面を具体的に記述させたところ、下の【資料6】から【資料8】のような日常生活での実践が見られた。設問3についても、設問1で「あまり」「ぜんぜん」と回答した児童のうち、8割以上の児童が今後「役に立つ」と回答していた。

右の【資料6】は、ある児童が、給食当番をしているときの様子である。自分の気持ちを表現した「わたしメッセージ」とは言えないが、相手のことを考えた表現である。この文章から、相手の気持ちを大切にしながら、自分の言いたいことを主張することができるようになったことが分かる。少しずつではあるが、日頃から意識することにより、「わたしメッセージ」で表現できるようになることが期待できる。

右の【資料7】は、ある児童が、友達とトラブルになって解決できたときの様子である。トラブルの原因が、自分と相手の考え方の違いにあることに気付いたものである。この文章から、自分の言動を振り返るとともに、相手の立場に立って考えることができるようになったことが分かる。また、相手の考えを認めることの大切さと、自分の気持ちを伝えて分かってもらったことの嬉しさを味わうことができたと考える。

右の【資料8】は、ある児童が、弟とお互いの意見交換ができたときの様子である。この文章から、自分の気持ちを一方的に伝えるだけでなく、相手の気持ちを聴いて分かってあげることができたことが分かる。このように、相手の気持ちを聴いたり認めたりすることができたのは、自分の気持ちを伝えるときに「わたしメッセージ」で表現できたからではないかと考えられる。また、学校だけではなく家庭においても実践できたことから、日常生活でよりよい人間関係をつくるための技能が定着していると考えられる。

「わたしメッセージ」が、どんな場面で役に立ちましたか？

学校で、友達と食器を運ぶときに、友達が「この食器はもたない」と言った時に、私が「わたしメッセージで「私も、昨日、その食器を持ってきたから、がんばって持つてみよう」と言ったと、友達は、すなおに聞いて、食器を持ってくれました。



【資料6 わたしメッセージ】

「権利の熱気球」が、どんな場面で役に立ちましたか？

友達とケンカをした時、後で何か原因なのを考えたら、友達と自分の考えが違うことに気付き、謝りに行ったら、仲直りできました。



【資料7 「権利の熱気球」①】

「権利の熱気球」が、どんな場面で役に立ちましたか？

わたしが見たいテレビ番組と弟が見たいテレビ番組がちがった時がありました。わたしは、自分の意見を言いました。弟の意見も聞きました。それなら、弟が「お姉ちゃんの見たいテレビも見てもいいよ」と言ってくれました。自分の意見をしっかりとって相手に分かってくれたの、うれしかったです。



【資料8 「権利の熱気球」②】

VII 研究の成果と課題

1 成果

- 人権教育の内容に基づいて年間指導計画を作成し、本時のねらいや道徳の時間及び学校行事等との関連を明確にしたことにより、児童の人権に関する実態に応じて意図的、計画的に指導することができた。

- 学級活動において、参加体験型学習を活用したことにより、主体的に学習に参加し、体験を通して自分の思いや考えを伝えることや、相手の立場に立って思いや考えが分かるようなよりよい人間関係をつくるための技能を身に付けさせることができた。
- 人権に対する意識を高めたり継続させたりするために、人権コーナーを設置したり活用したりしたことにより、人権に関する話題を共有しながら児童間の相互理解を図ることができた。

2 課 題

- 本研究の実践では、人権尊重に関する望ましい価値観での変容があまりみられないことから、道徳の時間における指導の充実を図るとともに、人権教育と他教科との関連を明確にした上で、教科等の特性を踏まえながら指導する必要がある。
- よりよい人間関係をつくる技能をさらに定着させるためには、学校においては継続的に指導するとともに、保護者に対しても啓発を行い、学校と家庭が一体となって取り組む必要がある。

— 引用 文 献 —

- 1) 2) 4) 宮崎県教育委員会（平成18年3月） 『宮崎県人権教育基本資料』－幼（保）、小、中、高、盲・聾・養護学校－
- 3) 人権教育の指導方法等に関する調査研究会議（平成20年3月） 『人権教育の指導方法等の在り方について [第三次とりまとめ]』～指導等の在り方編～

— 参 考 文 献 —

- 文部省（平成11年5月） 『小学校学習指導要領解説 特別活動編』
- 文部省（平成11年5月） 『小学校学習指導要領解説 道徳編』
- 人権教育の指導方法等に関する調査研究会議（平成20年3月） 『人権教育の指導方法等の在り方について [第三次とりまとめ]』～指導等の在り方編～
- 人権擁護推進審議会答申（平成11年7月）
- 宮崎県教育委員会（平成18年3月） 『宮崎県人権教育基本資料』－幼（保）、小、中、高、盲・聾・養護学校－
- 宮崎県教育委員会（平成19年3月） 『人権教育指導資料』－小学校指導展開例－
- 宮崎県教育委員会（平成20年3月） 『人権教育ハンドブック』－小学校編－
- 宮崎県教育委員会（平成7年3月） 『はぐくむ』指導展開例集
- 大阪府同和教育研究協議会編（1996年5月初版発行） 『わたし・出会い・発見』～自分らしさを発見し、豊かな仲間づくりをめざす教材・実践集～
- 有村久春著（2003年10月） 『キーワードで学ぶ特別活動 生徒指導・教育相談』金子書房
- 財団法人人権教育啓発推進センター（平成9年1月） 『参加型人権教育・啓発ガイドブック ワークショップ「気づき」から「行動」へ』

〈研究実践学校〉 都城市立今町小学校